ますが、社会生活の現実とそこで用いられている言語を通して、誰でも接することのできる領域なのです)。さまざまな思想についての議論は、口頭で交わされているような姿を呈していますが、俗っぽさはありません。単語や表現そしてイメージは、しばしば聖書から借用されています。これらすべての結果として、フランス語における全く新しい現象が生じたのです。カルヴァンは、知的であるけれども、日常語に近い散文を生み出したのです。その調子は重々しく、威厳を感じさせるものですが、親しみやすい面もあります。“素朴な明晰さ”と言ってもよいでしょう。そのような明晰さが学問的な神学と理性や知性が持っている価値を普通の言葉に結びつけているのです。

カルヴァンはこうして学問文化とフランス語との隔たりを消し去ってしまったのです。そして彼の時代までは区別されていた社会の諸階層やさまざまな価値観を包含する新しい民衆を作り出したのです。彼の論文は、しばしば抽象的で難しい問題を扱ってはいますが、その対象は成熟した受け手であるひとりひとりの読者なのです。つまりその当時までは、聖職者専用のラテン語によって表現され、理解されていた事柄を、日常語で理解する能力を持った読者に向けて書かれたものなのです。

Ⅲ. 聖と俗の関係

カルヴァンを彼の時代の文化のなかで位置付けるにさいして、注目していただきたい第3の、そして、最後の点は、聖俗の関係というさらに広い問題です。先程、ユマニスムを扱ったとき、すでに触れましたように、このことに関しては、カルヴァンは真理の啓示に関してエリート主義の考え、つまり、古代から継承し、学者のみが近づける聖書と並行した英知の伝統のなかに表現されている秘伝的啓示を認める考えを拒みます。カルヴァンは聖書の啓示において、同一の、唯一の真理がすべての人に公に提供されていることを喚起します。この真理は信者の教養、あるいは、霊性の程度がどのようなものであろうと、同じ方法と形ですべての人々に告げられ、もたらされるはずだと彼は云います。霊的エリート主義に対するこの拒否は、もちろん、宗教的な意味を持っております。カルヴァンは彼の時代のユマニストが賞賛し、エリートと個々人からなる大衆を分離する新たな手段となる文学的、哲学的教養を拒否します。プロテスタントの宗教改革は平信徒と司祭、信徒と聖職者、俗と聖の間の伝統的なカトリックの差別に対して意義申し立てをします。また、彼の時代のユマニスムに対してもカルヴァンは同様の戦いを追求しています。彼はこのため、聖の新しい領域（今度は、古代から継承した英知と文化の領域）と異教的古代の言語と精神的財宝にアプローチしていなった無教養なキリスト教徒のものであった世俗的領域との間に差異を導入するおそれのある文化的エリート主義を拒否します。印刷本の使用においても、また、フランス語を利用する仕方においても、カルヴァンがエリート主義を同じく拒否していることを指摘しておきました。

この点については、聖俗の関係の問題は私にとってはつねにカルヴァンの著作の核心であると思われます。この宗教改革者にとっては、生活、社会、文化のあらゆる領域において、神的啓示の領域と公共生活の領域の間の関係を明確に表わすことが重要であります。カルヴァンにとっては、このことを古代の異教宗教や中世キリスト教が経験した聖俗の区別を復興することなく、行なうことが重要であります。私は終わりに啓示と世俗のこの新しい関係を、カルヴァンの著作によって2つ簡単に示したいと思います。

第1の例は典礼と音楽の領域から引きます。明日の講演[5]ではとくにこのことについて話しますが、ここで扱う問題を示すために少し述べておきます。典礼音楽の領域では、カルヴァンの宗教改革は宗教改革以前に存在していた聖と世俗の厳格な区別を廃止しました。宗教改革以前は、典礼の歌曲はラテン語で、ほとんど聖職者だけに限られており、教会においてのみ歌われる（詩編詠唱と呼ばれている）音楽様式に属しておりました。というのは、このメロディは朗読と歌唱の中間であ

5）オリヴィエ・ミエ「カルヴァン、マロ、ユグノー詩編歌」p. 39 suiv.